

ノーサイド

北原 巖 男

たと書いています。鳥飼玖美子さんは、同時通訳や英会話講座、英語教育、異文化コミュニケーション等で活躍して来られています。長くなりますが、紹介したいと思います。

曰く

「・・・テレビ画面では、「津波」「避難」とある漢字にルビがふられ、やさしい日本語で「つなみ」に

1月23日付け、日本経済新聞夕刊「あすへの話題」欄。立教大学名誉教授の鳥飼玖美子さんが、「震災と多文化共生」と題して、能登地震発災時に発せられた「大津波警報」を伝える各局のテレビ画面を取り上げ、過去の2回の大震災では多数の外国籍住民に情報が届かなかった教訓が生かされ

去の経験を生かした成果だったように思う。・・・石川県には約1万7000人の外国人が在住。多くはベトナムや中国出身。日本全体でも国籍の上位5カ国は、中国、ベトナム、韓国、フィリピン、ブラジルである。グローバル化は海外だけ

やさしい日本語

しない人も多い在住外国人にとって共通語である「やさしい日本語」での情報提供が必要だと判明し、NHK放送研究所では「やさしい日本語」でどうニュースを伝えるかの研究を始め、「やさしい日本語」が画面上で使われたのは、過

もコロナ以前のレベルまで戻りつつあります。そうした彼らにとって、緊急事態発生時の伝達情報を日本国民と同じように受け取り、その内容を正確に理解し、かつ速やかに適切な行動に移ることが出来ることは、死活的に重要です。隊員・ご家族・本紙読者の皆さんも多いのではないで

「やさしい日本語」を使うことは、決して易いことではない、むしろ難しい。そんな思いを、「内なるグローバル化」が進む身近な日常生活・社会生活での体験を通じて抱いている自衛隊員・ご家族・本紙読者の皆さんも多いのではないで

マスコミはもちろん、自衛隊・警察・消防・医療等の政府関係機関、全国の自治体、関係企業・団体等が、「やさしい日本語」を予め研究し、準備し、即応態勢を維持しておくことの重要性を提起しました。日本は、これから益々多くの外国人を受け入れて行きます。その日本が彼らに対して果たすべき大切な責任の一つです。ふと作家井上ひさしの有名な言葉が浮かんで来ました。「むずかしいことをやさしく、やさしいことをふかく、ふかいことをゆかいに、ゆかいなことをまじめに書くこと・・・」

北原 巖男(きたはらい わお) 元防衛施設庁長官。元東ティモール大使。現日本東ティモール協会会長。(公社)隊友会理事